中学３年生

「国際理解と平和Ⅰ」
―広島から平和を科学する―

仲田恵子・川田基生
今村敦司・西川陽子
嘉賀正泰

【抄録】 中学３年では広島・大久野島への研究旅行を中心に、国際理解と平和についての総合学習を行った。戦争体験者の聞き取り調査をはじめ、人々と関わり合う様々な企画を織り交ぜながら、年間を通してグループで学習をすすめ、年度末にはその成果を研究集録にまとめた。

【キーワード】 平和　戦争　体験　杉原千畝　グループ学習　総合学習　広島　大久野島　国際理解　歴史学習　研究集録　折り鶴　ポスター作り　クロスカリキュラム　韓国・朝鮮問題

Ⅰ．学年テーマと目標

中学３年生の総合人間科のテーマは「国際理解と平和Ⅰ」である。本年度はこれに「広島から平和を科学する」というサブテーマを掲げて、前期は世界に視野を広げてグローバルに平和について学び、後期は広島に焦点を当てて日本と世界の関係を学ぶことを目標とした。

国際理解や平和の学習を進めるにあたり留意したことは、生徒達が自ら課題を設定し自主的に研究活動ができるように様々なレベルの体験・発見学習の機会を設定し指導してゆくことである。そして平和の尊さ大切さを頭と身体、そして心で感じ取ることが重要であると考えた。それにより、生徒達の国際理解や平和に対する視野が広がり、理解も深まることを期待した。

Ⅱ．総合人間科とキャリア形成

広島への研究旅行では「行為の理由」が意識される場面および生徒が選択しなければならない状況が、通常の学校での学習よりも多い。それは主体的、能動的な選択をうながしている。チャンスの選択の経験はキャリア形成上重要である。

ひとりひとりの生徒の経験の総体が学習内容となっており、グループでの相談のプロセスにおいては自分の個性、興味を他者との比較において認識してゆくことになる。

さらに、キャリア形成において重要な健康という要因、交友、ともに作業する喜び、集団場面での発想、笑いの効用などに気付き、身につけてゆくことになる。

自己の興味・価値観の把握、問題解決の手法、十人十色の賢さ、それぞれの持ち味でのグループへの貢献、学びのスタイルの自覚、夢の扱い方への習熟などの成果が期待でき、これらはキャリア学習的な価値尺度からも大事な事であろう。

集団的学習場面の多いこのカリキュラムはチームワーク的スキル、自己管理的スキル、全体の時間管理、コミュニケーション能力などの育成に優れている。

Ⅲ．学習方法と指導体制

学習方法は図書館での調べ学習や、個人で実施した家族や知人からの聞き取り調査、本校教師の特別授業、杉原千畝記念館の見学、広島研究旅行でのフィールドワーク、証言者の講演、研究集録作りなど様々な学習方法を通して「国際理解と平和」の学習に取り組んだ。

1．春休みの課題

中２の学年末に春休みの課題として「スクラップブックを作り」と「身近な人の戦争体験聞き取り調査」に関する指示を出した。まず中３の総人テーマである「国際理解、人権、平和」に関連する新聞記事や雑誌記事など、国内にこだわらず世界のニュースも含め身近な資料を集めてスクラップブックに貼り付け、印象に残った言葉や感想を書きとめる「スクラップブック作り」活動を春休みから夏休みまで続けるように指示した。

また、身近な人から戦争の体験を聞き、当時の人々の戦争に対する思いや戦前、戦中、戦後の生活について聞き取り調査を通して知る目的で「身近な人から戦争体験を聞こう」という課題を設定した。

2．オリエンテーション

４月15日のオリエンテーションでは、生徒のグループ平和学習につながるようなトピックを提供するために、海外青年協力隊、平和について考える意味、ヒルデスハイムの白いバラについてなど、学年団の教員がそれぞれの「国際理解と平和」に対する考えや体験談を聞かせた。その後、ピース・アニメ「つるにのって　とも子の冒険」を鑑賞した。「つるにのって」は、とも子という少女が平和公園でサダコ（佐々木禎子さん）に出会い、サダコの案内で原爆について知る物語である。翌４月16日の総合

人間科では、春休み中にスクラップブックに集めた記事の情報交換をグループで行った。

3. 丸山先生の授業

丸山豊先生を講師に迎え「日本と朝鮮との間にどんな問題があるのだろうか」というテーマで話していただいた。授業の内容は以下の項目を含んでいた。在日韓国人・朝鮮人、韓国・北朝鮮の子どもにとっての歴史的英雄とは誰か、1910年、1919年、1945年は韓国・北朝鮮にとって忘れられない年であるのはなぜか、「大韓帝国植民地化」と言わず「韓国併合」というのはなぜか、このとき韓国の消滅に心を痛めて歌をつくった詩人はだれか、「小早川、加藤、小西が世にあらば今宵の月をいかに見るらむ」の歌の解釈、韓国・朝鮮の人々の独立運動、1923年９月１日は何の日か、ベルリンオリンピック（1936年）のマラソン競技で優勝した孫基禎の写真と優勝旗、アメリカと戦う前にすでに戦争は始まっていた（1931.9.18，1937.7.7，1941.12.8)、皇民化教育、植民地支配、戦争への動員、強制連行、徴兵制、慰安婦問題、韓国・朝鮮人被爆問題、朝鮮半島になぜ２つの国が存在するのか、アメリカとソ連の占領、朝鮮戦争（1950年)、アジアと日本の問題、戦後補償問題、憲法９条など。１時間という短い時間ではあったが、丸山先生と生徒との対話形式で進められる授業の中で、日本と韓国・朝鮮の歴史を確認しながら山積する問題を整理し、問題の核心を明らかにしていった。生徒にとってはもちろん、中３学年団の教員にとってもたいへん学ぶところが多い意義深い授業であった。貴重な授業をしてくださった丸山先生にこの場を借りて感謝申し上げたい。

4. 遠足

①遠足の概要

杉原千畝記念館　岐阜県加茂郡八百津町　人道の丘公園内　見学

杉原千畝記念館とは、1940年リトアニアでナチス・ドイツの迫害から逃れるために集まったユダヤ避難民にビザを発給し、6,000人以上の命を救った元外交官・杉原千畝氏の人道的行為を顕彰する記念館。館内には千畝氏の生涯とその時代背景がパネル・映像によって構成・展示されている。

②学習方法・指導体制

・ユダヤ人の学芸員の講演
・学年通信に杉原千畝の生涯と業績を掲載
・社会科の授業で当時の時代、国際関係を解説
・学年通信で「杉原千畝物語」の紹介
・「センポスギハラ」の演劇鑑賞

5. 現代史学習・国際関係

1945年から46年について岩波書店『近代日本総合年表』を使って日にちきざみで学習した。

例１(生徒の注目した項目):「1945年６月１日　米スティムソン委員会、全会一致で日本への原爆投下を大統領に勧告」・・・生徒の読む平和学習の書物に出てくるアメリカ人の多くは原爆投下に反対している。

例２（質問)「明治憲法と新憲法の重なり合うこの時期、法律はどちらの憲法に従っていたか」・・・ポツダム勅令の存在、その超法規的、授権法的な性格、占領支配の構造を視野に入れうる質問である。

例３（質問)「食糧難の時代、天皇が食糧を確保したと考えてよいですか」・・・終戦直後をつぶさに眺めると食糧事情、その社会的影響が見えてくる。

例４（質問)「共産主義って何ですか」・・・社会科教科書からはその熱狂が伝わってこないが詳しい年表（日表？）からはその存在が伝わってくる。

6. 総合人間科と教科のクロスカリキュラムの取り組み

「国際理解と平和」という総合人間科の授業とのクロスカリキュラムの取り組みとして、英語において国際理解の授業を行った。

ここでは総合人間科と英語科のクロスカリキュラムで実施した平和・国際理解の授業実践について述べる。これは平成15年度科学研究費補助金（奨励研究）の補助を受けて「メディアを活用した異文化コミュニケーションの授業研究」の一環で平成15年度（中２)、16年度（中３）の２年間に渡って仲田が実施したものである。

研究の目的は、（１）欧米以外の異文化理解、（２）アイデンティティーの認識、（３）総合人間科･英語クロスカリキュラムのシラバス開発である。英語の授業で欧米偏重になりがちな現在の英語教育の状況を改善するため、図書・音声・映像等のメディアを活用する一方、外国人ゲストとの交流を通して欧米以外の異文化に触れる機会を増やした。また、生徒の視野を世界に広げ、日本人としての自らのアイデンティティーを認識し、自分たちがいかに平和で恵まれた豊かな社会に暮らしているかということに気づかせる授業を行った。

バイリンガル・ポスター作り（３時間)

バイリンガル・ポスターとは、ポスターの絵に２カ国語でメッセージを添えたもので、生徒がこの１年間総合人間科の研究を通して学んできたものをポスターというメディアで表現する活動である。総合人間科と英語のクロスカリキュラムの一環で、この学年は中２で「生命と環境」をテーマに２カ国語で書かれたポスターを作り、中３で「国際理解･平和」に関連したポスターを作った。メッセージは英語と日本語など２カ国語で入れるよう指導した。画材、はがきサイズの用紙を準備し、ポスター・

デザインのアイデアを持ち寄り、写実的なものやデザイン画などカラーで自由に絵を描いて、２カ国語でメッセージを入れた。メッセージは「平和」“Peace” などのような同じ意味の言葉を使うのではなく、２カ国語のメッセージが互いに補い合い相乗効果を生み出すことを期待した。メッセージの良い例としては、読んでイメージがふくらむもの、ストーリー性、発展性があるものである。このポスター作品を白黒コピーして、研究集録の表紙を作った。（資料：バイリンガル・ポスター作品）

インド（２時間）

１時間は図書館での調べ学習で、４人グループを作りインドに関して調べて英語で紹介する内容を決め、次にインド映画の一部を映像で紹介した。ラジニカーントが主人公ムトゥを演じる『ムトゥ～踊るマハラジャ～』の冒頭でスーパースター登場の部分と歌と踊りの部分を紹介した。この映画はインド映画旋風を巻き起こしたエンターテインメント巨編で、ミュージカル、アクション、ロマンス、コメディなど、インド映画のあらゆる要素が凝縮されている。

もう１時間はゲストを招いて国際交流の授業を行った。ゲストは名古屋大学留学生とインドへ４回旅行経験を持つ本校卒業生の２名であった。まずゲストがタージマハルにまつわる物語を英語で発表した。次に生徒が図書館の本を見せながらインドの建築、宗教、文化、人々の生活などについて英語で紹介した。それから卒業生がインド旅行の写真やサリーを見せながらインドでの体験を話した。インドに関する基本情報としてはトンボの本『インドおもしろ不思議図鑑』や妹尾河童著『河童が覗いたインド』からプリントを作成した。

モンゴル（５時間）

三省堂の教科書をベースに、出版社とモンゴル在住のバット（Batzorig）君とモンゴル人研究者Erdenetsetseg Divaa女史の協力を得て自主作成したリーディング教材に基づいて授業を行った。モンゴルの広大な大地やゲルに住む人々の暮らし、ナーダム祭りなどについて英文で読み、ピクチャーカードやビデオ映像で見て学んだ。

また、広島で被爆した佐々木禎子さんについてのストーリーを英語で読み、モンゴルで歌われている『折り鶴』の歌をオユンナのCDで聞いて歌い、GOD BREATHの活動についてビデオで見て『折り鶴』の日本語版である「INORI」を聴いた。

モンゴルについての国際理解授業のうち１時間は、図書館で調べ学習をしてモンゴルに関するクイズを英語で作った。クイズ発表当日は公開授業を行なった。モンゴル人留学生を招いて、モンゴルの紹介、『折り鶴』のモンゴル語歌詞朗読の後、生徒がモンゴル・クイズを発表して、どのクイズがモンゴルの特色を最も良く表しているか留学生に評価していただいた。授業の最後にモンゴル語ミニレッスンをして簡単な会話表現を練習した。生徒が英語で発表したクイズのうち評価の高かったものは次のクイズであった。

(1)What is “white food” in Mongolia?
　a. rice　b. milk　c. white fish

(2)In Mongolia, people will respect you if you can say the color of a certain animal. What is this animal?
　a. sheep　b. horse　c. camel　d. dog

(3)How is postal service different from Japan?
　a. They show ID cards to get mail.
　b. They tip the mail deliverer.
　c. They go to the post office to get mail.

民話から出題されたクイズもあった。「昔々、あるモンゴル人の旅人が夏の暑い盛りに鷹狩りのおとり鳥を連れて狩りに出かけた。１日中歩き回っている間に狩人は大変のどが渇いてきた。山の深い谷を降りて水を探してみると、山の麓に臼のような形をした石があり、その石のへこんだ所に水があって、赤と緑にきらきら色が変わって見えた。狩人がこの水を飲もうとするたび、おとり鳥が羽で何度も水を打って、最後にはすっかり水がなくなってしまった。狩人は腹を立てておとり鳥を殺してしまった。そこでクイズは次の通りである。

(4)What was the water?
　a. Bat's blood　b. Tarantula's venom
　c. Big snake's salive

ナイジェリア（２時間）

１時間は図書館で調べ学習をして、ナイジェリアの歴史、民族、文化、生活などについてのクイズを英語で作り、もう１時間はナイジェリア人の留学生をゲストに招いて交流とクイズの発表をした。ゲストはナイジェリアの紹介をした後で、生徒の発表したクイズの中で、ナイジェリアの特徴を最も良く表しているクイズを評価した。最後にナイジェリアで使われている言語で挨拶の練習をした。生徒の作ったナイジェリア・クイズのうち評価の高かったものは次の通りである。

(1)Which country colonized Nigeria?
　a. USA　b. UK　c. France　d. Portugal

(2)Nigerian people designed their national flag. White represents peace. Then, what does green represent?
　a. agriculture　b. friendship　c. equality

(3)Nigerian prisoners of war were sold to Europe as slaves around the 18th century. What was used for dealing then?
　a. silver dishes　b. copper plates
　c. iron sticks　d. golden lumps

(4)Many different tribes live in Nigeria. Which tribe is not Nigerian?

a. Ibo Tribe　b. Yoruba Tribe
c. Masai Tribe　d. Ibibio Tribe

ナイジェリア・クイズに答える生徒たち

南アメリカ・スペイン語文化圏（１時間）

まずメキシコの民族舞踊「ラ・バンバ」をビデオ映像とCDで紹介して歌った。何百年も前からメキシコ湾の町ベラクルスで演奏されている歌で、カリブの音楽とアフリカの音楽の影響を受け、歌詞にはベラクルスの港町の様子やメキシコの色彩豊かな歴史、この港から侵略者が入ってきた歴史などが歌われている有名なものである。次に南米ボリビアに留学した経験のある本校卒業生を招いて、ボリビアの紹介と留学体験について話を聞き、スペイン語の挨拶を習い簡単な会話を練習した。

以上のように総合人間科と英語のクロスカリキュラムで実施した平和・国際理解の授業では、英語の教科書SUNSHINE ENGLISH COURSEでほとんど扱われていない地域の文化や事情について、図書・音声・映像等のメディア、自主作成プリントを教材として活用して実施した。授業を英語で展開することにより、生徒のコミュニケーション能力を高めると同時に、外国語学習の動機付け、国際理解と協調の態度を養うことができる体験学習を実施した。

メディアの活用としては、異文化理解のための洋書教材や音声CD、ビデオ・DVDなど映像資料、生徒の絵図などを用いた。洋書教材は高価であるため研究経費で購入して授業の際に貸し出す方法をとった。

英語の授業で活用できる教材として以下の４種類の洋書を10冊ずつ、合計40冊を科研費補助金で購入した。生徒４人を１グループとして４種類の教材を配布した。

The Atlas of World Cultures『世界の文化地図』
The World Almanac for Kids 2004『世界年鑑子ども版』
The Atlas of World Religions『世界の宗教地図』
The Atlas of Islam『イスラム地図』

英語の授業ではこれらの洋書教材で情報拾い読み活動－Scanning for Information－をした。例えば「モンゴル」についての授業で活用する際は、以下のような課題を10問設定し、生徒たちはグループで情報交換しながら答えを見つけると同時に異文化理解を深めていった。

Let's find the facts about Mongolia.

(1)What languages do Mongolian people speak?
（*Cultures* p.26）
(2)What animal gives transport and food?
（*Cultures* p.26）
(3)What is the name of the southern desert?
（*World Almanac* p.143）
(4)What is the location of Mongolia?
（*World Almanac* p.162）
(5)What is the population of Mongolia?
（*World Almanac* p.163）
(6)Who is the leader of Tibet's Buddhism?
（*Religions* pp. 21, 27）
(7)Do they have religious freedom in Mongolia?
（*Religions* p.59）
(8)When did Genghis Khan create the Mongol Empire?
（*Islam* p.30）

また、外国人留学生との交流の機会を設け、留学生の母国の文化や言語、生活習慣や社会問題について紹介してもらい、生徒側も日本について紹介をしたり、調べ学習の成果を発表したりして交流した。招待した外国人留学生は一同に本校生徒の英語による発表を聞いて大変感心していた。留学生は「とても興味深かった」「発表内容が素晴らしい」「私の国の人もここまで知っている人は少ないだろう」「私の国の歴史をよく調べて良いクイズ問題を作ることが出来て感心した」「良い質問だ、それは私の国をもっとよく理解するために役立つ質問だ」などのコメントを生徒に伝えた。生徒たちにとっては、留学生に大いにほめてもらい、激励してもらって、それまでの努力が実って充実した日となり、また、留学生にとっても活発な生徒たちとの交流を通して日本の中学生のことを理解する良い機会となった。外国人ゲストとの交流の際に、生徒がゲストの話を聞くだけの受け身の交流ではなく、生徒が日本を紹介したり、ゲストの国について読んだことや調べたことが正しいかどうか質問したりして、主体的に活躍する場を設定することが望ましい。

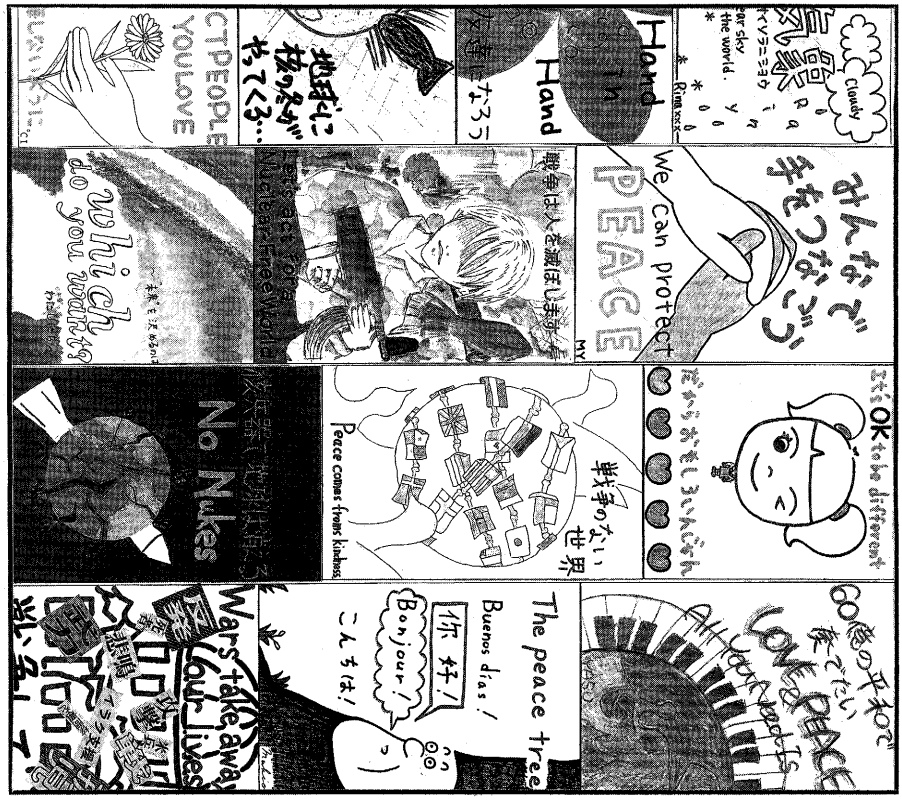
クロスカリキュラムの国際理解の授業で、生徒たちは英語の教科書で扱われていない国々について様々なメディアを活用して学習し、アジアやアフリカ出身のゲストとの交流を通して欧米以外の異文化に触れる機会を得て、視野を世界に広げることができた。一方で生徒たちは世界の中の日本人としての自らのアイデンティティーを認識し、２カ国語ポスターという形で平和のメッセージを発信することができた。

資料：総合人間科と教科のクロスカリキュラムの取り組み　バイリンガル・ポスター作品

2004年度　中学3年総合人間科研究集録

国際理解と平和

―広島から平和を科学する―



3年生　平和ポスター作品
名古屋大学教育学部附属中学校

Ⅳ．学習過程

総合人間科の授業だけでは計画したすべてのプログラムを完了することが無理だったので、時間が足りない分はＬＴなどの時間で補い、フィールドワークの準備や礼状書き、研究集録の原稿づくりなどの活動をした。

旅行後はまず研究集録の作成をしたので、各研究グループによる研究報告の発表は２月になったが、発表の際には出来上がった研究集録を資料として活用することができた。

前期	日　時	活　動　内　容
第１回	４月15日	オリエンテーション・アンケート、ビデオ:「つるにのって　とも子の冒険」
第２回	４月16日	春休みにスクラップブックに集めた記事の紹介・情報交換
第３回	５月６日	発表:「身近な人の戦争体験を聞く」 各クラスで実施
第４回	５月20日	５限：杉原千畝についての学習（ビデオを含む） ６限：平和学習グループで「国際理解と平和」に関するテーマを設定：
第５回	６月３日	講演　丸山先生　テーマ「日本と朝鮮との間にどんな問題があるのだろうか」平和学習グループ研究のテーマ決め
第６回	６月17日	平和学習グループで調査・先生との打ち合わせ
第７回	７月１日	５限に発表準備 ６限に平和学習の発表　各グループ５分
第８回	９月９日	研究旅行のグループ研究テーマ設定、フィールドワーク先の候補を検討
第９回	９月30日	フィールドワーク先についての調査・事前学習、この日までにアポ取り完了
後期		
第１回	10月14日	フィールドワーク依頼状書き、質問事項の確認、行程表作成
第２回	10月28日	事前学習の発表　２クラス合同で班研究テーマについて発表・行程の説明
第３回	11月11日	中３広島修学旅行
第４回	11月25日	資料整理　研究集録の原稿作り
第５回	１月20日	広島研究について各グループ発表準備、Ｂ紙などに書く。研究集録印刷完成
第６回	２月３日	広島研究について各グループの発表　研究集録を資料として使う
第７回	２月17日	「広島から平和を科学する」ディスカッション
第８回	３月10日	一年間の研究のまとめ、アンケート

Ⅴ．研究旅行までの生徒の取り組みの様子

1．身近な人に聞く戦争体験

ＡＢ両クラスで発表された中からいくつか紹介する。

Ａ組の発表より

タイトル：学徒出陣　～学生の仕事～

聞いた人：祖父（昭和５年生まれ）

Ｙさんの聞いた話：

「小学校６年生時に戦争が始まった。中学２～３年生に、学徒出陣のために馬方の仕事をする。馬方とは、兵士のために鉄砲の弾や兵士の食料を運ぶ馬を引く仕事のこと。大人は一人でやるが、子供なので二人がかりで馬を引いた。名古屋が空襲にあって停電してしまった時、馬のえさのわらを「おしきり」で切っていて、誤って指を切ってしまった。指は皮一つで繋がれて空襲の中治療を受けた。また、製鉄所で働いたりもした。兄はサイパンで戦死した。中学４年生時に終戦を迎えた。

考察：

「もっと学生を楽しみたかった。」と祖父は言いました。祖父が今の私の年齢くらいの時、こんなことがあったなんて、知りませんでした。「馬方」という仕事をしていたと知り、驚きました。指は今でも少し曲がっていて、祖父はそれを「戦争の跡」と話していました。お父さんの戦死を知った時、とても悲しかったそうです。そんな思いをする戦争は、これから絶対起こってほしくないです。」

タイトル：耐え抜いた生活　～戦争を通して～

聞いた人：祖母の知り合い（小４の時名古屋に来て、小５から徳川町の小学校に通い始める。高等学校１年の「12月８日に戦争が始まった。卒業し、三菱電機製作所に入社。昭和19年12月23日、昭和20年３月の大空襲を経験。その後、奥町（一宮市の近く）に疎開。奥町から会社に通った。）

Ｔさんの聞いた話：

Ｎさんのお兄さんは、何かの破片が首に刺さり、背中まで貫通して死んでしまった。小４（11歳）の時に、名古屋に来た。このときは戦死してしまった兄が連れてきてくれた。移動の電車の窓はすべて閉められていた。外の工場などは、軍部の秘密であり、見ることは許されな

かった。小５から徳川町の小学校に入った。その後、国民学校に入り、高等科１年の12月８日に戦争が始まる。翌年の一学期の終わりに英語の教科書がなくなった。教科書は墨で塗らなければいけなかった。卒業後、三菱電機製作所に入社。働かずに遊んでいると、徴用が来て遠くに行かされてしまうというのが当時の現状。

Ｎさんは昭和19年12月23日の三菱電動機大空襲（名古屋地区初空襲）と昭和20年３月の空襲を経験した。敵は照明弾を落として明るくしてねらってくる。照明弾というのは明るすぎる。初めて見た時、足がすくんで外に出られなかった。毎日夜の８時、９時頃警報が鳴る。そして、防空壕にみんなで隠れた。警報が解除されるのは夜中になってから。防災頭巾をかぶってみんなで逃げた。真っ暗な道を歩いた。歩いていて何かにつまずく。踏んでも痛くなく、柔らかかった。翌日の朝、死体がたくさん落ちていた。このとき気がついたのだけど、夜中にこの死体につまずいていたのだった。そして電信柱の一つも残っていなくて、家もすべて燃えてしまった。

他の人たちにくらべれば、食べ物にはそんなに困らなかった。一応食べるものはあった。でも、塩もなければ醤油もない。食べ物には味がなかった。当時の一般の月給は15円なのに対し、お米は一升５円もした。配給は大根の４分の１位を５人で分けるというように、とても少なかった。入社してからは、会社が軍需工場だったから、食事があった。食事があるということは、うれしいという気持ちを通り越すものであった。衣服はすべてもんぺに作り直さなければならなかった。

Ｎさんの戦後の暮らしは、朝５時に起きて会社に通う毎日。月給は45円だった。戦後でも当分は食べ物が少なかった。戦争に対する思いとしては、戦争なんて絶対にやるものじゃないということだ。今の人は、生活などの昔のことを知らないから、戦争をやることができる。しかし、絶対にやるものじゃないと思う。今のＮさんの考えは、あのとき死んでいれば今はない。人生何があるかわからない。明日の命はわからないけれど、毎日毎日明日があればおもしろいというものだそうだ。

考察：

戦争中の生活についていろいろ知ることができた。話の中で印象に残っている部分は、死体につまずいたというところ。死体につまずくとはどのようなものだろう。想像しようにも全く想像がつかない。死体がそこら中に落ちていることも信じられない。当時はそんなことが当たり前だったのかと思うと、胸が痛んだ。

食べ物に味がない…。私たちは味のある食べ物を当たり前のように毎日食べているけれど、これは本当に幸せなことなのだと感じた。幸せだし、とてもありがたいことなのだとも感じた。

戦争というものは、人々の命を奪うだけでなく、人々の生活までも苦しめる、本当にひどいものなのだ。私は、今回のインタビューを通して、自分は本当に幸せなんだなぁ…と実感した。食べ物はあるし、着るものもある。住む場所もちゃんとある。そして、学校にも行ける。このような生活を送れることは、昔の人々から見れば、考えられないことなのだろう。このインタビューを生かし、この一年間の総合人間科の活動を充実したものにしていきたい。」

Ｂ組の発表より

「８月９日午前11時２分、世界で２発目の原子爆弾が落とされた。爆心地近くでは、水を求めてさまよう人がたくさんいて、浦上川には力尽きたたくさんの死体があり、放射線の影響で被爆から約60年たった今でも原爆病で苦しんでいる人が大勢いるそうだ。

長崎の祖母が西山で３才の時に被爆した。障子ががたがた地震のようにゆれ、生後10ヶ月だった祖母の弟は被爆の時に割れたガラスがお腹に刺さり、それを知らない親や親戚たちがガラスが刺さったまま抱きかかえたため、祖母の弟はずっと泣いていたという。防空壕の中はとても暗く、近所の人と身を寄せて長い間閉じこまっていたそうだ。祖母の父、兄２人も戦争で死んでしまい、祖母の母は幼子３人をかかえて苦しい生活を送った。」

「昭和20年、名古屋の町の大半が空襲で焼けて、祖母を含む人たちが防空壕に逃げ込んだ。そしてそのふたを開けると空が真っ赤でびっくりしたという。祖母はそこから東別院の方へ逃げたが、家族が離ればなれになってしまい、東別院も燃えていたので行きどころがなかったそうだ。その途中に大きな防火水槽があり、そこへ逃げ込んだ人もいたが、空襲のために水がお湯になっていて、「助けて」といいながらたくさんの人が亡くなったという。祖母は唯一焼けなかった親戚の家で一晩過ごし、夜明けにごはんを食べた後、焼け跡を見に行くと、くすぶっていて焦げ臭い臭いがしたという。その後、あちらこちらで空襲が起こり、軍需工場の「愛知時計」に爆弾が落ち、挺身隊の生徒達が昼食を食べようとしたところで、たくさんの学生が死んだ。なんとか生き残った人も堀川に飛び込んだが、そこで死んだ人もたくさんいたという。川にはたくさんの人が浮いていて、怪我をした人は名古屋市のバスによって病院に運ばれていった。後から思うと、無惨な所をたくさん見てしまったという思いでいっぱいだった。祖母はその時友人の家にいたが爆弾が落ちたところに近かったので、攻撃に巻き込まれ、友人は亡くなったという。その後は勤めていた寮に泊めてもらい８月15日の終戦を迎えた。

祖母は、戦争で心に深い傷をおい、苦しんだのだと思いました。僕は、戦争を体験していないので、どういう状況だったのかよく分かりませんが、祖母の話す様子からとてもおそろしく、ただ生きることしか考えられなかったと思います。この話を聞くと戦争というものは、

僕の思っていた以上に悲惨なものだと思いました。これから戦争について考えるときには簡単に考えないようにしたいです。」

生徒達は、身近な人から戦争体験を聞くことにより、戦争が自分とは遠い世界の出来事だという認識を新たにすることができると考える。特に、自分の祖母から名古屋の空襲について聞かされると、一層実感するのではないだろうか。中学３年生のＦＷは広島であるが、名古屋にも空襲の跡はまだ残っている。広島での学習もいいが、地元の戦争にももう少し目を向けた実践があってもよいと感じた。

2. グループ研究　前期の平和学習

前期の平和学習として歴史的、グローバル的視野で平和について調査する活動を行った。各クラスで６つの平和学習グループを作り５月から調査を始め７月１日に２クラス合同で発表授業を行った。一人の教員が２～３グループを指導する態勢をとり、その上に学年団の教員全員からすべてのグループにアドバイスができるようにアドバイスシートを作って、参考図書、参考ウェブページなど参考資料の提示、テーマごとの歴史的背景や事実関係の情報提供、調査方法や調査の焦点に関するアドバイスを行った。

平和学習グループの研究テーマ

Ａ１	「平和活動」ＰＫＯ
Ａ２	「各国の平和のシンボル」
Ａ３	「アメリカの人種差別」キング牧師
Ａ４	「ビバ☆平和―平和を目指す運動」 日本から世界への平和活動
Ａ５	「国際ボランティア」 外国への募金活動、募金の種類と使い道
Ａ６	「黒人奴隷」奴隷制度について
Ｂ１	「スポーツと国際理解」オリンピック
Ｂ２	「ボランティア」Beautiful Volunteer
Ｂ３	「世界中のこどもの権利」こどもの権利条約
Ｂ４	「憲法９条の改正」 国会での憲法改正案の進みぐあい
Ｂ５	「黒人ヒストリー」 黒人差別の歴史　アパルトヘイト
Ｂ６	「他の国の平和・自衛隊に対する意識」 憲法９条、コスタリカ

ＡＢ両クラスからひと班ずつ以下に紹介する。

Ａ組４班

テーマ：「ビバ☆平和　～日本から世界への平和活動～」

調べた内容：

日本で平和活動を行っている４つの団体について調べた。

一つ目は「ピースウォークｉｎ神奈川実行委員会」で、この団体は平和を呼びかけて歩くというピースウォークをきっかけにできた団体である。

二つ目は「平和推進委員会」という団体である。この団体では、街頭募金やアフリカへ毛布を送る運動、委員会内では平和新聞の作成と発行などをしている。

三つ目は「韓国の原爆被害者を救済する市民の会」で、韓国の被爆者と協力し、様々な救護活動をしている。

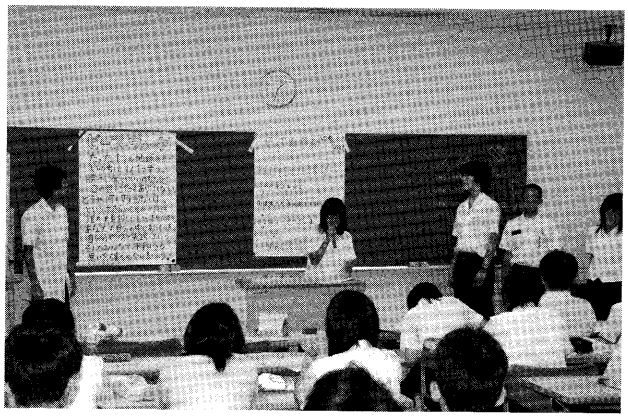
四つ目は「生協コープ鹿児島」で、この団体は年に一度「平和の集い」を開催する。この集いでは、戦争体験者から聞く空襲体験談や、組合員の平和活動報告などをする。その他にも様々な平和活動をしている。

これらの団体の活動目的は、平和を願う自らが活動をすることで、平和を創り上げていくというものです。その共通点としては、ただ単に平和を願うのではなく、自らが行う平和活動というものを通して平和を願っているということです。

班員の感想：

今回学んだ平和活動とは、私たちが今まで聞いたことのない、初めて聞くようなものばかりでした。それは、私たちが思っていたよりも地道な活動であり、一般の人たち、他人事ということですましてしまうような人たちが、平和のために努力している。そして、平和活動をしている人たちは、ただ単に平和の願っているのではなく、平和を願う気持ちの上で、自らの力で平和を創り上げようとしている、ということを学びました。

今回、今まで知らなかったとても興味深い内容を調べることができ、いろいろと勉強になりました。このような平和活動がいろいろな場所で行われている限り、世界はまだまだ平和とはほど遠いものかも知れない。でもその中で、私たちにできることを見つけ、実行していきたいと思います。



B組6班

テーマ「他の国の平和・自衛隊に対する意識の発表」

B組6班は、永遠に中立の立場であることを誓い、国際平和維持活動に積極的に参加している国であるスイスや軍隊は持っているけれども、戦争には協力しない国であるスウェーデンなど世界各国の平和に対する考え方について調べ、日本の平和に対する考え方と比較した。

また、日本は、憲法9条や前文で平和主義を誓っているが、今の日本は本当に平和なのだろうか、自衛隊とは何をするための集団なのか、自衛隊はどうあるべきか、日本はどうしたら平和な国になることができるだろうかなどについて、これからの平和学習を通して日本の未来を背負う自分たちがどうあるべきか考えてみようと訴えかけた発表であった。

3. 学校祭演劇コンクール

A組が「ぬちどぅ宝」、B組が「未来へ…」という演劇を学校祭演劇コンクール上演した。AB両クラスがそれぞれ平和をテーマにした演劇に取り組み、戦争の残酷さ、平和の大切さ、命の尊さをクラス演劇という形で発信することに成功した。AB両クラスの演劇の様子を紹介する。

A組「ぬちどぅ宝」

この話は、沖縄の戦時中に4人の少女（はつみ、ノブ、とし子、八重子）がそれぞれの道を辿る物語である。学徒動員がかかり、仲の良かった4人が事情から別の人生を歩まねばならなかった葛藤と悲しみを伝えるものである。この学年の生徒は、前から戦争に関連する劇を演じてみたいと強く希望しており、台本の絞り込みからキャスト、練習まで自分たちでスムーズにこなしていった。生徒はこの劇を演じるにあたり、次のようなコメントを残している。

「このお話のように、戦争は女も子供もすべてを巻き込みました。すべての楽しみを奪い、学校生活もできなくなり、日々おびえて暮らさなければなりませんでした。私たちと同じ年頃の学生たちが、こんなに命に関わる決断をせまられ、たくさん命を落としていきました。これは沖縄の話ですが、広島でも同じことです。原爆により、無差別に本当にたくさんの命が奪われていきました。いったい誰が何のために戦争を起こしたのでしょうか。私たちは絶対に、もう二度と戦争を起こしてはいけません。戦争を繰り返さない第一歩としては、戦争の悲惨さ、どれだけひどいものだったかを知ることが大切ではないでしょうか。それを知る上で、今回の演劇はとても大きな効果があったように思います。人の死や友達との別れなど多くの強いメッセージ、「戦争はもう二度と起こしてはいけない。」が、伝わってきました。役者だけでなく、すべての人がこの演劇に関わることで、そのメッセージを身をもって感じ取れたと思います。その思いをいつまでも忘れることなく、次の世代へと伝えていかなければならないのだと思いました。」

単なる一つの行事を、総合人間科のテーマと絡めて考え、状況想起が最も深く求められる「演劇」を通して、自分の平和に対する考えを深めていくという意味において、とても有意義な行事となったと考える。また、この後の広島での証言者の話を共感的に聞く上でも、重要である。今後の中学3年生がなんらかの形で平和に関連した演劇を選び続けてほしいと考える。

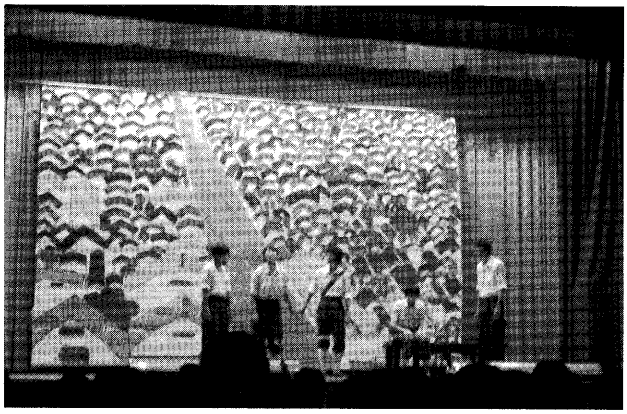
B組「未来へ…」

3年生にとって最後の演劇コンクールは、命の尊さと戦争の恐ろしさを伝えようと3年B組の劇は「未来へ…」になった。

長崎に住んでいる盲目の少女、春江が主人公である。春江は6人家族で徴兵先で父親が死んでしまい、残された家族みんなで助け合って生きていた。そんな時、幼なじみの武の行った部隊が壊滅状態だという知らせを受ける。春江は落胆するが、武は奇跡的に帰ってきた。喜んだのもつかの間、空襲がひどくなり、ついに母親と妹2人が死んでしまった。そして、親友の加奈子の恋人である和夫が徴兵され特攻隊となり戦死した。激動の日々の中、ついに長崎に原子爆弾が投下された。春江は奇跡的に助かるが、3年後白血病となりこの世を去った。

この劇を通して一番難しかったのは、戦争を知らない生徒達が当時の人々の気持ちを理解し、表現することであった。戦争の悲惨さをいかにリアルに伝えるには戦争を体験した人の心情がわからなくてはいけなかった。

生徒達は演劇コンクールが終わった後、研究旅行で広島に行き、実際に被爆した人から話を聞いたり、被爆した建物を見てきた。そこで、「未来へ…」の劇で表現した戦争のイメージと実際に被爆した人の体験した現実というものがかけ離れていたことを目の当たりにしたが、「未来へ…」の劇を通して生きることの大切さを考えることができたといっていた。



Ⅵ. 広島研究旅行

1. 生活班と研究班の活動内容

今年度の研究旅行は、生活班と研究班の二つのグループを作った。基本班は、１日目の宮島散策、平和記念資料館見学、証言者の方の講話と宿での人員点呼等に関わる班である。研究班は２日目のＦＷの班である。昨年度までは、生活班で話し合って広島のＦＷ先を検討していたが、話し合いの末に自分が行きたいところを泣く泣くあきらめた生徒がいることがわかり、より高いモチベーションでＦＷに行かせたいとの考えから、組織は複雑になったが２つの班を編成することとした。結果としては、生徒の満足度は高くなったようであるが、それでも自分の行きたいところをＦＷができない生徒もいたようである。話し合いによる納得とグルーピングの最適化を今後も考えていきつづける必要性を感じた。

2. 3日目の体験学習

今年度の中学３年生は、３日目に愛媛県の伯方島と大島の４カ所に別れて、体験学習を行った。これは、生徒にそこでしかできない体験をして、地元の人とのふれあいを通して、自然に対する感性を磨き、コミュニケーション能力をより高めてほしいと考えたからだ。

愛媛県のグリーンツーリズム担当の渡辺様に協力を依頼し、３日目の午前中から昼過ぎにかけて４つのプログラムを用意し、生徒に希望をとって分散して体験する形をとった。プログラムは以下の４つである。

⑴たこ五目釜飯作り（大島）

地元の郷土料理を地元の方から教えていただいて一緒に作り、昼食として食べるという体験。(29名参加)

生徒感想：

伯方島でたこ釜飯作りをしました。まず、たこのぬめりを取り、足を切りました。ぬめりを取る時、まだたこが生きていて、私たちはおそるおそるさわるのに対して、教えてくださった方々は、とても慣れた手つきで手本を見せてくださりました。やっぱりふだんからやっていて慣れているのかなと思いました。たこを切るのにも悪戦苦闘している時も、コツを教えていただきました。それからたこを炒め、その間に野菜を切りました。炒めたたこを少しずつ食べたのですが、とてもおいしかったです。

⑵魚・太刀魚開き方体験

地元で捕れる魚や太刀魚を、地元の方に教えていただきながら開いてさばき、昼食として食べるという体験。（８名参加）

生徒感想：

今回の体験学習でこれを選んだのはなんと９人。他とくらべてちょっと少なかったのですが、楽しく過ごしました。この体験でやったことを説明します。太刀魚という細長い魚を三枚に下ろします。そして、適当な大きさに切ってから揚げます。これで終了です。とっても簡単そうに思いますが、実はなかなか難しいのです。魚を三枚に下ろす時に骨に包丁が当たるか当たらないかというところでさばいていくのです。最初は包丁で骨を切って反対側の身も切ってしまったり、慎重すぎて骨に身が残りすぎていたりしました。最終的にはみなある程度上手にできるようになりました。揚げてできたフライはみなでおいしく食べました。同じ場所で体験学習をやっていた人たちも食べて、とても好評でした。今回、この体験を選んだ人たちはみんな満足したと思います。ふだんはこのようなことはしないので、とても貴重な体験になりました。そして、今回この体験学習を開いてくれた人たちに、本当に感謝しています。

⑶パン作り…地元の方に教えていただきながらパン作りをするという体験。トッピングに地元の特産物である柑橘系のものを加えることもできる。(20名参加)

生徒感想：

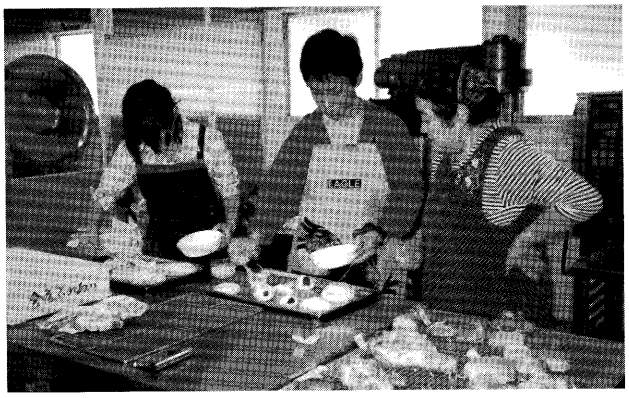
私たち20人は、大島のふれあい工房というところに行きました。わたしは、パン作りと聞いていたので、粉を混ぜてこねてと、一番最初めからパンを作るのだと思っていたのですが、私たちがしたのは、ガス抜き、形作り、卵黄塗りだけでした。なので、楽かなぁと思っていたのですが、小さいパン種６つと大きいパン種２つで形を作るのがなかなか大変でした。パン作りを教えてくれたおばさん方は、みなさんとても陽気な方たちで、親切にロールパンの作り方を教えてくれたり、卵黄を塗るコツを教えてくれたりしました。元気なおばさん方のおかげでとても楽しい体験となりました。

⑷みかん狩り体験…特産物であるみかん狩りの体験。（20名参加）

生徒感想：

みかん狩りには、生徒20人と今村先生、丸山先生で行きました。みかん畑は、バスでは入れないところ、山の斜面にあり、みかん畑からは海を見ることもできました。みかんだけでなく、柿もいただくことができました。海が近いとみかんも柿の甘くなるといっていたと思います。みかん狩りの後に、キャンプ場に行き昼食をと

りました。昼食は、鯛飯、里芋のお吸い物、天ぷらでした。冷たいお弁当だと思っていたので、とてもうれしかったです。キャンプ場と海が近かったので、海にも行くことができました。みかん狩りをして、人の温かさに触れることができました。細やかな気配りをしていただいたり、温かいご飯を出していただいたりと、良い思い出となりました。



3. 研究旅行およびグループ研究・フィールドワークの概要

広島に焦点を当てたグループ研究は以下のように各クラス７つのグループに分かれて行った。夏休み前のグループ分けに始まり、夏休みに各自で準備し、９月から本格的に調査活動に入り、広島研究旅行でフィールドワークを実施して、その後、調査結果を研究集録にまとめ、２月４日に研究発表を行った。

研究の視点として、一般の広島平和学習にありがちな原爆被害だけに焦点をあてたものでなく、加害の面にも注目している点は評価できる。日本人の証言者からだけでなく、在日韓国人や中国人、日本に留学している外国人留学生などからも貴重な話を聞くことができた。

広島平和研究グループの研究テーマ

班	研究テーマ
A１	「GENBAKU　—No place to return—」 原子爆弾の構造、放射能の人体への影響
A２	「戦時中の教育・法律」
A３	「３つの奇跡」 体と心に傷を負った被爆者が立ち直るまで
A４	「Effects of Radiation放射能の人体への影響、被害」
A５	「ゼロからの闘い—since 1945.8.6.—」 平和都市になるまで　建物・人を支えたもの
A６	「平和活動をする人からのメッセージ —私たちにできることを考える—」 「被爆二世の心」
A７	「歴史の心を見る」 —被爆者が負った心の傷、在日韓国人、中国人の被害
B１	「放射線が及ぼす人体への影響」
B２	「Atomic Force and Bombs」 原爆による被害について
B３	「戦争と気象」
B４	「日本はどう見られているのか —交流の必要性—」 広島在住の留学生との交流を通して
B５	「苦しみは終わらない」 放射線の影響、被爆者について
B６	「広島から発信している♥愛と平和♥」 広島市と袋町小学校の平和の取り組み
B７	「美術を通して伝える平和　—平和の絵本—」

今村グループ

Ａ組３班

テーマ:「３つの奇跡」体と心に傷を負った被爆者が立ち直るまで

テーマ設定理由：

広島の人が原爆投下と戦争からどのようにして立ち直ってきたかについて考えたいと思った。そして、立ち直るに当たっての心の後遺症はどうなっているのかについて、ＦＷで調べたいと考えて設定した。ＦＷで話を聞いた方の中で、「３つの奇跡」の話が特に心に残り、テーマとした。

ＦＷ先：広島県原爆被害者団体協議会　被爆を語り継ぐ会副会長　武田靖彦様

研究内容：

事前学習で、原爆被害者の身体の傷と心の傷について調べた。身体の傷は、放射能によるもの、ケロイドなどについて調べ、心の傷は原爆被害者の手記等を読んで調べた。

ＦＷで話を聞いて印象に残ったことは、「３つの奇跡」だ。１つ目は友達６人で受けた国民学校に自分一人だけすべったために、仲間の５人が被爆してなくなり、自分だけが生き残ることができたということだ。２つ目は、終戦間際の８月６日は、自分の勤労奉仕が休みの日で、外に出て働くことがなかったために難を逃れることができたということ。３つ目は、テニアン島で日米の戦いで犠牲となった部族の方の追悼式に出ることになったとき、アメリカへの憎しみの気持ちを乗り越え、世界平和を築く決心をしたということだ。この決心が、武田さんの今日を支えているという。

また、原爆で実のお姉さんを失った話を聞き、その姉のためにも今自分ができることをしようと決心できたことを知った。お礼状の返事として「人は生まれながらに幸せに生きる権利がある。生命は自分のもの」という言葉をいただいた。

感想：

・私は戦争について資料などを見て少しはわかったつもりでいたけれど、思っていた以上に残酷でした。
・武田さんの話を聞いて一番思ったことは、私は家族や友達と一緒に過ごすことができて幸せだなぁということです。武田さんのお姉さんの話を聞いて、周りの人を大切にしたいと思いました。
・武田さんの前向きに生きる姿勢が伝わってきて、頭が下がる思いがしました。

Ａ組７班

７班　テーマ:歴史の心を見る―被爆者が負った心の傷、在日韓国人、中国人の被害

テーマ設定理由：

被爆者の負った心の傷、身体の傷を知るとともに、在日韓国人、中国人の被害について学び、過去から現在への歴史を、人の心の移り変わりから探求しようということから設定した。

ＦＷ先：

・広島県原爆被害者団体協議会　被爆を語り継ぐ会副会長　武田靖彦様
・韓国人原爆被害者特別委員会　郭福順様
・日朝被爆者連帯を進める会　原　廣司様

研究内容：

事前学習は韓国、中国人の被爆者についての問題を調べた。被爆による被害とともに、差別や劣悪な待遇の状況が重なっていることがわかった。また、心の傷としてＰＴＳＤについても調べた。

ＦＷは、最初に武田さんの話を一緒に伺い、その後、郭さんの話を聞くグループと、原さんの話を聞くグループの二手に分かれた。武田さんの話は３班と共同で聞いたのでその内容は省く。

韓国人の郭さんは、生活を成り立たせるために両親と日本に来ていた。貧しい暮らしをして、母を失い、父も失業しておばに引き取られた。やがて戦争が始まったが、そこでいじめられるようになった。ただ一人助けてくれる友達がいて、その子から前向きに生きる姿勢を学んだ。いじめる子が馬鹿なのだと思えるようになった。戦争で被爆をして、その後平和行動を起こすが、精神的に立ち直れない自分がいた。やっとの事で子供もでき、成長する姿を見た時、この子を戦争へ送りたくないと強く思い、そのために自分ができること（＝戦争を語り継いで平和を訴える）ができるようになったという。やっと精神的に立ち直ることができたのだ。

証言者の定信さん、武田さん、原さんにＰＴＳＤの症状はなかったのかと聞いたところ、生きるのに必死でそんなことを感じる余裕がなかったという答えが返ってきました。

感想：

・いじめられても頑張って生き抜いた人だからこそ、自殺や心中をする人をした人が許せないという気持ちがわかった。
・私にとってＦＷの研究結果は意外なものだった。戦争、原爆という私には想像もつかないほどの精神的ショックを受けた人々はきっと何かしらの症状がでたのだろう、どんな症状でどうやって克服したのだろうと考えていたのです。しかし、被爆者の方々は、そういった症状があったとはおっしゃっていませんでした。なぜあれほどの大きなキズを乗り越えることができたのでしょう。周りの皆が同じ状況だったということもあるかもしれません。しかし、とにかく生きていかなければという思いが強かったのではないでしょうか。どんなキズも乗り越えて、とにかく生きていかなければ、次の世代に伝えていかなければ、という強い

思いが、今の被爆者の方々の生きる力になっているのだと思いました。

嘉賀グループ

A組1班　テーマ:GENBAKU —No place to return—
原子爆弾の構造、放射能の人体への影響

A組4班　テーマ：Effects of Radiation　放射能の人体への影響、被害

B組2班　テーマ:Atomic Force and Bombs　原爆による被害について

訪問先：
放射能影響研究所（A１・４）
街頭インタビュー（B２）

研究旅行およびグループ研究・フィールドワークの概要:
いずれのグループも原爆が人間与えた影響を客観的に調べたいというテーマを設定した。A１・４のグループは戦争兵器としての原爆を科学的に検証し、現在の我々の生活の中にある放射能と比較し具体的なイメージを得るためにその努力の大半を費やした。ゆえにFWも放射能影響研究所という広島の中では稀有な「アメリカの作った放射能研究所」に取材を行った。ここではかなり分かりやすく放射能の解説をして頂いたので発表もパワポを駆使してかなり充実した発表が行うことが出来た。

一方B２グループは原爆の与えた心理的な影響を調べることに集中した。当初どのように調べるのかFW先も含めてかなり意見を交換し、調査したようだが結局結論は街頭インタビューを実施することであった。現代において広島の住民は当時に比べかなり入れ替わっているであろうが、それでもなお名古屋における意識とは明確に違う何かが得られるのではないかという仮説を立てたのである。用紙を大量に準備し当日はかなり充実したインタビューが実施できたようであった。

以上からそれぞれがある程度予想していた結果も得られ、また新たな事実も見つかり広島にまで足を運び、調査を行ったことには一定の満足を得たと見て間違いないであろう。

川田グループ

A組2班

テーマ：戦時中の教育・法律

テーマ設定の理由：日本人はなぜ戦争をして原爆を落とされるに至ったのか、当時の日本ではどのような教育が行われていたのか、また、罪のない多くの人々の命を奪った原爆を落としたアメリカは何故責められないのか、原爆は戦争犯罪ではないのか、という疑問からこのテーマを設定した。

ＦＷ先：広島平和研究所（ＨＩＰＥ）事務局長小早川健氏

研究内容：

戦時中の教育について、尋常小学校一年生から修身という科目で、教育勅語を信奉、君（天皇）に忠、親に孝という教育がされていた。軍事訓練や防災訓練などの戦時色の強い訓練が頻繁に行われていた。大日本帝国憲法に「天皇は神聖にして侵すべからず」とあり、また、教育勅語では「天照大神に始まる天皇の祖先が建てた国はその子孫の天皇が治めるべき」とある。天皇は現人神として教えられ人々はそう信じ、敗戦後には天皇に申し訳ないと切腹する人もいる程であった。

味方・敵の諸外国に対する意識については、当時の日本人は諸外国に対して極端な敵対心や親近感は持っておらず、敵であっても良いところは尊敬していた。当時の日本人が戦争をし続けたのは天皇の存在によるものが大きい。戦後、教育勅語は、絶対視された歴史とその内容から懐かしがられる風潮がなくならず、失効確認の会議が行われるほどであった。

原爆投下は戦争犯罪ではないのかという問題については、戦勝国アメリカが戦争犯罪を裁く立場にあるため、たとえ原爆投下が反人道的虐殺行為で戦争犯罪に値する行為であっても日本はアメリカの戦争責任を裁ける立場にない。戦勝国アメリカは裁かれる立場を逃れているということになる。

諸外国から見た原爆投下について、アメリカ、韓国、インド、マレーシア、シンガポールの見方を調査した結果、アジアでは原爆により戦争が終わり、日本の支配から解放されたという考えがある。アメリカではアメリカ軍人の尊い生命を守るためには仕方がなかったという考え方がある。広島・長崎への原爆投下は一部を除き肯定的な評価が多かった。

生徒たちはそれまで疑問に思っていたことを色々と質問することができて学ぶことの多いＦＷであった。「大変勉強になったし、さらに興味が深まった。資料をたくさん用意していただいて感謝している。」と述べている。当時の日本人は天皇に対して畏怖の念を持っていて、核兵器の被害を受けるまで天皇を自分たちの神と信じて敵に屈しない姿は、現代の戦争——宗教戦争や自爆テロなど——と重なるところがあって恐ろしいと感じた生徒もいた。原爆が戦争犯罪であるかどうか調べて行くにつれて、「原爆投下は戦争犯罪なのだが、戦勝国アメリカには誰も口答えできない…」ということを実感し、これは現代の世界に通ずるところがあり、「強者が全権を握るのは間違いだ。このエゴイズムを世界から消さない限り世界平和はありえない」という意見を持つようになった。

A組5班

テーマ：ゼロからの闘い—since 1945.8.6.—平和都市になるまで　建物・人を支えたもの

テーマ設定の理由：原爆によってすべてを失ってしまっ

た広島が現在は大都市の一つとなって世界に平和を訴え続けている。ゼロからのスタートであった広島がどのようにして今日の広島を作り上げたのかということに興味を持ってテーマを設定した。

ＦＷ先：広島市役所社会局原爆被害対策部・中国新聞社

研究内容：

原爆によって孤児となった身寄りのない子どもたちの他に、片親が生存している場合でも放射線の後遺症で著しく健康が損なわれ生活力も乏しく困窮し孤児同然の子どもが多くでた。「原爆孤児」と呼ばれるようになったこれらの子どもたちは有志が設立した広島戦災児育成所など戦災孤児施設に入所した。

原爆投下により広島市の７万６千戸の建物のうち６万7860戸が壊れ、都市機能は壊滅状態であった。現在14万人の死亡者のうち８万９千人が広島市の原爆戦没者名簿に記載されている。原爆により一瞬にして10万人以上の人が死亡したことが広島の人々の心に一番大きなダメージを与えた。平和記念公園内の広島平和都市記念碑を中心にして毎年８月６日に「原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」が行われ、記念碑の内部の石室に納められている原爆死没者名簿に新たに死亡が確認された方々の名前が追加記帳される。

中国新聞社では戦争当時の新聞社のことや戦後の様子を調査した。新聞社の全社員の３分の１近くである113人が亡くなり、新聞発行ができなくなった。1943年５月に９つの新聞社で新聞相互援助契約（戦災で新聞を発行できなくなった新聞社の代わりに制作・発行する契約）を結んだが、被爆後発行できる状態だったのは４社だけだった。中国新聞社は８月６日のうちに朝日大阪本社と毎日西部本社へ代行制作を依頼した。新聞が発行できない間、社員はメガホンを持って大声で叫んでニュースを伝えた。これを口伝隊という。その後も枕崎台風の襲来などがあって代行印刷を続け、やっと自力印刷できるようになったのは被爆から３ヶ月後のことだった。

生徒たちは広島市役所で都市の復興について調査した。中国新聞社では被爆後の新聞社の様子を聞いた後、地図を使って爆心地を中心にして全焼区域に色を塗りながら自分たちの住んでいるところと比較して原爆の規模や当時の様子について考えた。また、原爆投下後の上空写真を、現在の同じ場所の写真と比較して、当時の100m道路は学徒が都市の全焼をくい止めるために作った防火帯であったこと、原爆による倒壊家屋の規模は、写真で見るとほぼ真っ白でほとんどの家がなくなったことなどを知った。

新聞社の写真の中に学徒動員で作業をする少女の写真があり、生徒たちは自分たちと同世代の少年少女が1945年８月６日に約26800人動員され、そのうち7200人が原爆で亡くなったことを知り、自分たちの学校の全校生徒約600人の12倍の人数に当たると気づき、平和の大切さを実感していた。

Ｂ組７班

テーマ：美術を通して伝える平和　―平和の絵本―

テーマ設定の理由：これまでの平和学習の中で「はだしのゲン」や「つるにのって」などの映画を鑑賞し、芸術で平和を訴える芸術家がいることを知った。彼らは戦争をどのようにとらえ、どのように表現したのか。どのような理由で平和の絵を画こうと思ったのだろうか。これらについて知りたいと思い、美術を通して伝える平和というテーマを設定した。

ＦＷ先：広島市現代美術館　学芸員出原均氏

研究内容：

広島市現代美術館は次の４つの方針のもとに運営している。①広い分野からの作品の収集・保存　②多種多様な展示　③活発な普及活動　④調査研究活動

1945年８月６日に広島に原爆が投下された直後は、人間は衝撃が大きくそれをすぐに絵に描くことはできなかった。その後、人々は原爆によって廃墟となった町並みや原爆ドームの絵を描いていた。

原爆と芸術の関わりについての歴史的な背景は、1951年にサンフランシスコで太平洋戦争の講和会議が開催され、この後初めて原爆について自由に報道できるようになった。1952年に初めて原爆が日本全国で報道された。国民はこれを機に原爆の悲惨な状況を知ることになった。1954年に第五福竜丸事件があり、1955年以降盛んに戦争に関する作品が多く作られるようになった。

この頃、丸木位里さん、俊さん夫妻が原爆を伝えなければならないと「原爆の図」を描き始めた。丸木夫妻は被爆者ではない。今までの作品と異なり、廃墟や原爆雲を描くのではなく、被爆者自身を中心に忠実に描いて、1950年代から80年代まで15作品からなる「原爆の図」を描き続けた。

日本は島国であるため、陸続きのヨーロッパの国々と異なり、民間人を巻き込む戦争はほとんど無かった。そのため原爆が落ちる以前は平和についての絵は日本にはほとんど無かった。しかし原爆が落とされて日本が変わった。被爆者たちは自ら筆を執り悲惨な光景を後世に伝えようと素人でありながら絵を描いていた。1948年に丸木夫妻が「原爆の図」を描き始めたとき、プロの画家である丸木夫妻の絵は今までのどの作品とも違い、凄惨で悲愴に満ち、混乱におきながら心を打つものであった。丸木夫妻らの手によって日本の現代美術のドアが大きく開かれた。

現代美術作品を見ていると、なぜこんなものが良いのかと理解に苦しむ作品もある。しかし、それは大きな思い違いである。美術とは美しいもの、下手ではないものとは違う。美術はドイツ語でKunst（クンスト）だが、

その意味は幅広く医療やアクロバットも含まれる。素晴らしい技術、つまり優れた技術それが優術であり真の美術である。そのような作品をどのように楽しめばよいのか。その答えは「考える」ことにある。たとえ全然美しくない作品でも作者が込めた思いは等しいと思うので、それを自分自身で感じ取り、作者の意図していることを自分なりに考えることだ。実際に見て考えること、それが現代美術つまり優術を楽しむためのルールである。

生徒たちは現代美術館を訪れ、学芸員出原氏へのインタビューを通して、原爆が美術に大きな影響を及ぼしたことを実感した。それまでの美しい絵画からメッセージ性を重視した絵画への転換、景色や建物を描いていた絵画から被爆した人々を中心に据えた表現方法への変化など。生徒たちはまた、平和の大切さや命の尊さを伝える方法が一つではなく、証言や読み物や映画などの他に絵本や絵画でも伝えることができると実感した。生徒たちはインタビューの後に広島市現代美術館で様々な作品に出会い、一見理解の難しい現代絵画にどのように向き合うかを、それぞれの持つ創造性をかき立てるような体験を通して学ぶことができた。

西川グループ

B組1班

「放射線が及ぼす人体への影響」

B組1班は、以前白血病をテーマにしたテレビドラマを見たことや、「はだしのゲン」を見て、原爆には放射線が深く関わっていることを知ったので、「放射線が及ぼす人体への影響」をテーマに選んだ。

研究概要は次のとおりである。

事前学習としてα線、β線、γ線などについて調べた後、広島フィールドワークでは、原爆被害者やその子ども20万人以上について主にガンの発生率や死亡原因の調査を行っている「放射線影響研究所」に行った。フィールドワークでは放射線によって引き起こされる病気で有名なのが白血病であり、放射線をあびて白血病になる確率は年齢が低いほど高いといわれていることや当時の白血病の治療は薬剤治療が主流だったが、現在では骨髄治療やさい帯血移植も行われていることを知り、被爆した人たちの調査結果について聞いてきた。

[25km以内で被爆した人のガンに関する調査]

	死亡者（1950～1990）	放射線が原因と考えられる推定死亡者数
白血病	176人	89人（51%）
その他のガン	4687人	399人（7%）

[25km以内で直接被爆した人すべてが平均被爆線量の場合の生涯におけるガンリスクの推定]

被爆時年齢	放射線関係のガンで亡くなる人数の推定（人）
10歳	2．8人
30歳	2．4人
50歳	0．4人

この研究で、生徒達は原爆で使われた放射線の影響を学んだと同時に、放射線には有効的な使い方（医療、研究、エネルギーなど）があることを知り、多くの人に放射線の有効的な使い方を知って欲しいという気持ちを抱くことができた。

B組3班

「戦争と気象」

B組3班は、気象という日常生活において欠かせない情報が戦争によってどのように害され、その状況でどのように伝えていったかを知りたいということで、「戦争と気象」をテーマに選んだ。

研究概要は次のとおりである。

広島フィールドワークでは、全国初の気象専門博物館となり、その本館（当時の旧広島地方気象台）の建物が広島市指定重要文化財となっている広島市江波山気象館に行った。

そこでは次のような質問をした。

① なぜ気象館を被爆当時のまま残してあるのか？

一番大きな理由は、日本の建築技術が欧米の建築技術に追いついたころの代表的な建物なので、日本の建築技術の発達を示す「近代化遺産」として建築の専門家から高く評価され、歴史的価値があるから。

② 黒い雨について？

当時は雨について研究できる状況ではなかったので詳しいデータはないが、広島に住んでいた被害者の証言を参考にして作ったデータがある。

③ 原爆後にどのように気象を伝えたか？

職員が自ら広島の町をまわり、広島に住む人々に直接伝えた。

④ 戦争中に気象観測が軍事機密になり、国民への発表がなぜ禁止になったのか？

当時、日本政府の拠点が広島にもあり、広島唯一の気象観測所だったので、気象情報を提供していたが、気象情報は戦争の戦略を実行または検討するときの大事な判断要素であった。日本付近の気象を相手国に知られないように、情報漏れを防ぐため軍事機密になった。

黒い雨の様子、原爆被害の状況、原爆の威力などを知り、生徒達はフィールドワークに行く前よりも戦争や原爆の恐ろしさを実感した。さらに、原爆が落ちてから約１ヶ月後に枕崎台風という大きな台風が広島に来たとき、江波山気象観測所（現江波山気象館）では台風の接近を事前に分かっていながらも、情報を伝えるためには一人ひとり直接伝達するしか方法がなく、十分な対策が取れなかったため多くの人々が亡くなったという話を聞き、生徒達は戦争と気象の関わりに気づき、現在当たり前のように毎日気象情報が得られることを平和の証だと感じることができた。

Ｂ組５班

「苦しみは終わらない」放射線の影響、被爆者について

Ｂ組５班は、被爆者は表面的な傷だけでなく、心の傷を負っているのではないかということから、心の傷を知ることで、平和について考えてみようと被爆者に話を聞くことになった。

研究概要は次のとおりである。

原爆が落とされた当時19歳で、国鉄職員として電気系の仕事をしていた久保浦さんに当時の話を伺った。平和記念公園内にある時計台、平和の鐘、原爆ドーム、原爆供養塔、韓国人原爆犠牲者慰霊碑、被爆した墓石、平和の泉、原爆の子の像、平和の灯などの説明を聞きながら伺った体験談は以下のようであった。

原爆当日の朝、久保浦さんが仕事場で電話をかけようとした瞬間にピカッと空をおおうほどのものすごい光が発せられた。逃げるまもなく久保浦さんは５ｍほど吹き飛ばされ、４、５分気を失い、目が覚めると何も見えない真っ暗なところにいた。原爆による煙で太陽の光が遮られ、ようやく光がさすともやもやした茶褐色のほこりが一面に舞い上がり、床を見ると手に血が付いており、まわりは血の海だった。久保浦さんは全身の左半分32ヶ所にガラスがささり、唇がはれてしまったため声が出なかった。逃げようとしても気が遠くなるほどの痛みで動くことができなかったが、我慢して歯をくいしばりながら逃げ、釘やがれきで体中傷だらけになったそうだ。その後、倒れた久保浦さんは助けられ、病院に行くことができたが、その時に脳が半分見え、顔が腫れ、皮膚も赤くたれていて、どこに目があるかすら分からなかった少女の状態が今でも忘れられないという。久保浦さんは、左目を失明し、悲惨な体験の中で、精神的、肉体的にも苦しみ、戦争の恐ろしさ、平和の大切さを身をもって体験したことで、譲り合いの心が大事、平和を壊すのは戦争だとおっしゃった。

生徒達は久保浦さんから想像を絶する体験談を聞き、真剣に国際社会に目を向け戦争のない世界を目指すべきだと考えた。それは決して容易なことではないが、一人ひとりが平和な世界について考えることが大切なことではないかと感じていた。

仲田グループ

Ａ組６班

テーマ：①「平和活動をする人からのメッセージ―私たちにできることを考える－」、②「被爆二世の心」

テーマ設定の理由：広島で平和活動をしている人々がどのような考えを持ってどんな活動をしているかについて知り、自分たちにできることは何かを考えるために①のテーマを設定した。また、「被爆二世」という言葉を聞いて、どのような人たちのことを言うのか、どんな問題を抱えているのかを知るために②のテーマを設定した。

ＦＷ先：①NAC（The Never-Again Campaign）事務局吉清由美子氏、平和記念資料館内の案内を勤めるピースボランティア　小泉喜代子氏、

②広島県被爆二世団体連絡協議会事務局長　角田拓氏

研究内容：

この班は９名からなる班で、そのうち７名が①のテーマ、２名が②のテーマで研究を進めてきた。

①「平和活動をする人からのメッセージ」については、インタビューからNAC事務局の活動がアメリカ各地の学校･教会を訪問して、原爆映画の上映や合宿を通して、アメリカの人々に日本の文化や広島・長崎の実情を伝えるものであることがわかった。歴史を風化させず、次世代に被爆者の痛みや悲しみを知ってもらうことで世界が変わると思うので、今でも苦しんでいる人がいることを「伝える」活動が大切である。

②「被爆二世の心」については、自らが被爆二世で様々な平和活動に取り組んでいる角田氏に話を聞いて、被爆二世の抱える遺伝的な問題、健康不安、親が被爆者であることに起因する貧困、被爆二世に対する差別など、様々な問題があることが分かった。角田氏は昨年12月にエノラ・ゲイの展示に抗議するため、被爆者の坪井直氏や小倉佳子氏とともにスミソニアン航空宇宙博物館別館に行った。また、旧日本軍が遺棄した毒ガス弾の被害者やその研究をしている中国の学者とも交流して、平和問題に取り組んでいる。

生徒達は被爆者だけでなく、被爆体験を持たない世代の人が核の恐ろしさを伝えたり、被爆者や被爆二世の悲しみを伝えたりする国際的な平和活動に関わっているのを知った。そして生徒たちが自分たち自身で何ができるかについてＦＷ先でアドバイスをいただいてきた。「生徒たちがこのようにいろいろな形で広島を知ろうとしてくれるのが嬉しい。」「いつまでも今の心を忘れないように。いろいろな史実を知ってほしい。」「平和は争いで勝ちとるようなものではない。犠牲の上に成り立っては平和ではない。」「核は今も存在している。核兵器の恐怖を後世に伝えていってほしい。」と言われて、今度は自分た

ちが次の世代に伝えていく使命があることを生徒たちは認識した。

B組4班

テーマ：「日本はどう見られているのか－交流の必要性—」広島在住の留学生との交流を通して

テーマ設定の理由：「日本は原爆の被害者」であると同時に「日本は戦争の加害者」であるという事実がある。これまで「アジアから見た加害者としての日本」というテーマで研究を進めてきた。広島では中国や韓国出身の留学生にインタビューをして、今後のアジア国際関係をどのようにしていくべきかについて考えようとテーマを設定した。

ＦＷ先：広島市留学生会館　中国人留学生２名、韓国人留学生１名

研究内容：

インタビューの相手は、日本が戦争中に攻めた国の若者であった。留学生に質問した内容は⑴日本に来る前の日本のイメージ、⑵日本について母国で学んだこと、母国での平和教育について、⑶両国間の戦争について、⑷今の中国・日本のいいところ、⑸日本に来てからの印象、⑹平和な世界を実現するために私たちにできることであった。

留学生の意見や感想は以下の通りであった。⑴日本の若者は暇である。⑵南京や瀋陽には戦争の記念館や記念碑がある。そこに行くと日本人が原爆資料館に行ったような気持ちになる。戦争が起きないようにみんなで頑張りたいと思っている。⑶韓国は政治面で変えようと急ぎすぎた。日本人はもっと政治に関心を持ち、視野をもっと広げるべきだ。⑷日本と韓国はお互いを客観的に見つめ合うこと、お互いを分かり合うことが大切である。過去の問題でもめてほしくない。姉妹都市の交流はとても良いと思う。もっと交流を深めていくといいと思う。

生徒たちは親切な留学生と和やかにしっかりと話をすることができたことを大変嬉しく感じていた。生徒たちは「とても充実した貴重な時間を過ごせた、すごく面白かった、すぐ近くの国なのにこんなに違うのかとびっくりした」という感想であった。生まれた国が違うとものの見方が違うことや、日本の学生より勉強に対する意欲や熱心さが強いこと、自分の意見をはっきり述べられることなどを実感し、留学生の視点から日本や日本人を見直すことができた。

戦後59年経った今日でもまだ戦争に起因する数々の問題が未解決のままである。尖閣諸島問題、日本が遺棄した毒ガス弾問題、在日中国・韓国人被爆者に対する医療保障問題など。今も苦しみ、困っている人々がいるこれらの問題は、過去の問題ではなく、すべて現代の問題であり、これらを解決しなければならないのは私たちだという認識を強くした。

B組6班

テーマ：「広島から発信している♥愛と平和♥」広島市と袋町小学校の平和の取り組み

テーマ設定の理由：原爆を落とされた広島ではどのように平和活動をしているのかという疑問からこのテーマを設定した。

ＦＷ先：袋町小学校平和資料館清水博孝先生、広島市役所平和推進部大久保忠之氏

研究内容：

広島市役所を訪問して次のことがわかった。①広島市は世界恒久平和のために自治体レベルでの平和活動を国連等に呼びかけている。②広島市では小中学生に対する平和教育のカリキュラムがあり、平和文化センターが協力してセミナーを実施したりして平和事業を行っている。③広島市には被爆者団体が数十団体ある。④平和な世界の定義は、武力衝突がないこと、食料や環境に問題がないこと、利益や愛情を受けられることなど。⑤平和のために私たちがすべきことは、それぞれの年代でできることをすること。自分たちの生活の上で、自分の考える平和な世界への取り組みを行うこと。⑥広島市では今後、戦争の悲惨さや残酷さを伝えていくために、被爆者が高齢であることから、⑴今のうちに被爆者の証言ビデオを作る。⑵広島・長崎講座などで平和を学問的に整理する。⑶若い世代の人たちに原爆の実相を伝える。⑷CDで朗読するなどして世界中に伝える。⑦平和市長会議加盟都市は109カ国、640都市で、呼びかけ都市数は195カ国、2303都市である。

袋町小学校の平和活動について清水先生にインタビューして次のことがわかった。①平和教育——⑴保存　⑵継承　⑶学習　⑷発信　この４つのキーワードをもとに平和教育を行っている。折り鶴集会、ピースサミットなどの行事がある。②今の日本の学校の平和教育は地域によって格差があるのでその格差をなくすべきである。③平和のために私たちがすべきことは温故知新。戦争のことを知識として知り、それを自分たちでかみ砕いていく、まずは簡単なこと（友達と仲良くすることなど）から少しずつ。④今後、戦争の悲惨さや残酷さを伝えていくために、資料館などを通じて平和の大切さを訴えていくこと、世界平和のために生徒が発信すること、思いやりの心を持って人と接することなどが大切である。

生徒たちは広島市役所と袋町小学校を訪問する以前に、名古屋と広島の小学生に原爆や平和に関するアンケートを実施した。袋町小学校と名古屋市立露橋小学校で5，6年生に同じアンケートを行った結果、広島の小学生の方が当然ながら原子爆弾についてよく知っており、その過半数が原爆については学校で先生と話したと解答

した。これは広島市の小中学生対象の平和教育カリキュラムの成果であろう。FWの間、生徒たちは常に今自分たちには何ができるかということを念頭に様々な平和活動の様子を聞いていた。「まず簡単なことから」というアドバイスをいただいて、「真の平和とは何か、平和を実現するために何ができるか」を追究して生きていきたいという意識を一人ひとりが持つことができた。

4. 平和セレモニー・平和宣言文（今村）

場所：広島平和公園　原爆の子の像前

1　はじめの言葉
2　平和宣言
3　献鶴
4　黙祷
5　平和の歌「空も飛べるはず」スピッツ

平和メッセージ Peace Declaration

戦争の醜さ、残忍さを思い知らされた広島・長崎への原爆投下から59年が経ちました。尊い命、健康な体、動物や草木…。原爆は、戦争は、すべてを奪っていきました。

ところが、戦争は繰り返されてきました。今もイラクでは、アメリカが武力勢力に攻撃をしかけたり、テロが起こったりしています。攻撃の様子は連日のように報道されています。

私たちはその映像や写真などから目を背けたことはなかったでしょうか。広島に来る前に見たユダヤ人に対する迫害や、広島・長崎の原爆の映像から目を背けたことはなかったでしょうか。

人間だれでも、残酷なシーンを見ると、目をそらせてしまいます。しかし、それが現実なのです。実際に起こっていることです。目を逸らさないでください。どんなにつらい現実でも目を逸らさなければ、「二度とこのようなことを起こしたくない」という想いにつながり、それが“平和”という花の種まきに発展していくはずです。

私たちは、“平和の花”を育てていかなければなりません。ところが、花の命を奪ってしまう“核兵器”が、この世界には存在しています。イラク戦争の原因の一つも、核の問題でした。“核兵器”をなくすために、原爆の被害を、平和の大切さを“伝えて”いかなければなりません。いいえ、“伝える”だけでなく、“伝わる”世界を私たちが創っていかなければなりません。

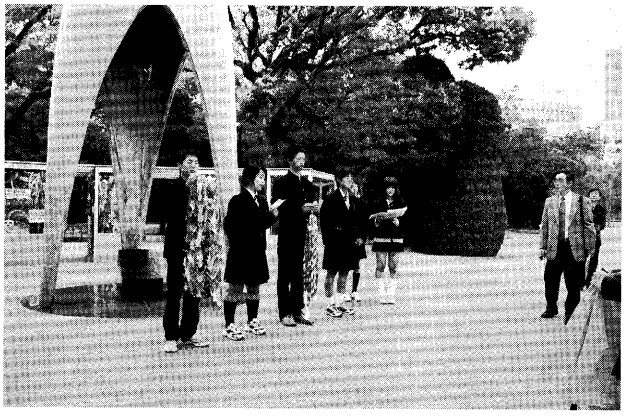
“核兵器”が世界から消えたその時、“平和の花”は大きく開花するでしょう。

これからの未来に、戦争が起きないために、私たちは忘れてはいけません。戦争の悲惨さを。人間の記憶から戦争という事実を消してしまったら、再び争いが起きてしまいます。もし、戦争が起きそうになっても、私たちは「戦争反対」と言える人になります。私たちは平和への道を歩んでいくことを、ここに誓います。

2004年11月10日

名古屋大学教育学部附属中学校３年生一同

5. 折り鶴づくり



生徒全員で千羽鶴を折り、原爆の子の像前で献鶴式を行った。この写真で中央の小さい鶴が本校生徒の千羽鶴で、左端の大きい鶴はアメリカの高校生が折ったものである。以前から交流していたアメリカの高校の先生に「広島へ行きますよ」と話したところ、メリーランド州のノースウェスト高校から「世界平和の誓いを広島に届けてほしいと」折り鶴が国際宅急便で送られてきた。ノースウェスト高校在校の日本人留学生に習って、アメリカの高校生が初めて折り紙をして作った鶴もあった。折った生徒が自分の名前や、平和のメッセージを書いてある鶴もあった。私たちは本校生徒の千羽鶴とともに、ノースウェスト高校の生徒に代わって彼らの鶴を捧げ、彼らとともに平和を誓いあった。

Ⅶ. 平和学習事前事後のアンケート集計と分析

平和学習事後アンケート集計と分析

中３研究旅行アンケート

1　研究旅行の平和学習プログラムの中で一番良かったのは何ですか。下の中から一つ選んで、記号に○をうち、その理由を書いてください。

平和セレモニー（２人）　平和記念資料館見学（12人）　証言者を囲んでの講話（14人）
広島ＦＷ（42人）　毒ガス資料館見学（１人）　資料館元館長村上さん講話（２人）

理由
広島ＦＷ：自分たちで足を運んで知りたいことを知ることができた。原爆の怖さが伝わった。
証言者を囲んでの講話：貴重な体験ができた。

分析：今年度の目的（モチベーションの高いＦＷ）が達成できていてよかった。証言者の講話は、直に話を聞く機会として生徒にとって貴重な体験となっているようである。

2　研究旅行の平和学習プログラムの中で一番改善した方が良いと思ったのは何ですか。下の中から一つ選んで、記号に○をうち、その理由を書いてください。

平和セレモニー（32人）　平和記念資料館見学（７人）　証言者を囲んでの講話（７人）
広島ＦＷ（３人）　毒ガス資料館見学（16人）　資料館元館長村上さん講話（12人）

理由
平和セレモニー：場所を変えた方がいいと思う。声がみんなに聞こえなかった。
毒ガス資料館見学:実際の工場跡も見学したかった。

分析：平和セレモニーは、今年度の準備の中でもあまり時間が十分にとれなかったプログラムで、生徒への事前の周知もうまくいかなかったものだった。しかし、なんらかの形で自分たちの気持ちを現地で表明することは大切だと考えるので、今後セレモニーに向けた事前指導をどのように取り組むかが課題である。

毒ガス資料館、元館長講話の話などの大久野島の関連プログラムについては、元館長の講話時間の設定がうまくいかず、結果として資料館島の見学時間があまり充分にとることができなかったことが反省点である。

3　研究旅行のプログラムの中で一番良かったのは何ですか。下の中から一つ選んで、記号に○をうち、その理由を書いてください。

厳島神社散策（10人）大久野島自由レク（12人）キャンプファイヤー（41人）肝試し（14人）

理由
キャンプファイヤー：一生懸命企画したものがみんなによろこんでもらえた。２年生の時よりパワーアップしていた。
肝試し：自分が一番頑張った。おもしろかった。

4　研究旅行のプログラムの中で一番改善した方が良いと思ったのは何ですか。下の中から一つ選んで、記号に○をうち、その理由を書いてください。

厳島神社散策（23人）大久野島自由レク（17人）キャンプファイヤー（８人）肝試し（25人）

理由
肝試し：もうちょっと長くしてほしい。怖すぎた。
厳島神社散策：時間が足りなかった。周りに何があるかわからなかった。

分析：肝試しのコースが短くなってしまったことが挙げられる。キャンプファイヤーのプログラムが長引いた上に、雨が降ってきて長いコースを取ることができなくなってしまった。厳島神社散策は、広島駅での電車を安全確保のために一本見送ったこと、そのために舟を一本見送ったことで、時間が短くなってしまったことが原因であるが、生徒にとってはこちらの予想以上に居心地がよい場所であったらしく、ゆっくりと見て回ることができなかったことも改善要望としてあがった原因であったと考えられる。

5　しまなみ体験活動について、良かった点と改良した方がよい点をそれぞれ書いてください。

良かった点
魚開き方：おいしかった。日常ではできない。
たこ釜飯：スムーズにできた。
パンづくり：おばさんたちがおもしろかった。
みかん狩り：みかんがおいしかった。

改良した方がよい点
魚開き方：自分で作ったものは自分で食べたい。
たこ釜飯：自分たちで作ったものを食べたかった。
パンづくり：もっと教える人を多くしてほしかった
みかん狩り：みかんを取る時間をもう少し多くほしかった。

分析：今回の体験活動は、初めてのことであり、最終日のために絶対に遅れることができないとの認識が強くあった。従って、各プログラムとも時間延長しないことを強く意識しすぎるあまり、簡略化もしくは一つのことにかけられる時間を短くしすぎた傾向があった。結果的

には福山でかなりの時間を取ることができたが、各プログラムとも、もう30分は余分にかけられることが結果としてわかった。今後このようなプログラムを行う際には参考にしていただければと考える。

6 研究旅行の進め方に関して、良かった点や改良した方がよい点があれば書いてください。

・時間配分がうまくできていた。
・福山のおみやげタイムが持てた。
・もう一泊ほしい。
・全体的に説明不足だった。

分析・反省：全体的に過密スケジュールであったと考える。１日目の厳島神社散策、２日目のＦＷ、３日目の体験学習と毒ガス資料館見学というように、大きなプログラムが目白押しで入っていて、さらに移動があるのでこのような結果になってしまうのは仕方がないことである。抜本的な解決策は、大久野島の宿泊を見直すことであろう。毒ガス関連の見学価値は大きいので、訪問という形で寄り、宿泊はもっと自由度のある場所で行うことで、寄り幅広いプログラムができると考える。また、この研究旅行で付けさせたい力を何とするかという面からもプログラムを検討すると、新しい試みが生まれてくるように思う。

7 研究旅行を通して一番得たものは何ですか。学習面とそれ以外の面について、理由を含めて書いてください。

勉強面
・原爆に対する思い。・戦争の怖さ、当時の悲惨さ。・歴史を知ることができた。
・毒ガス資料館元館長の話など、めったに聞けない話が聞けた。・集団行動の時間厳守。

その他の面
・きちんと集まるということ。・楽しいたくさんの思い出。・友情が増した。
・みかん狩りを通して、農業がどんなものか知ることができた。
・みんなで仲良く過ごすこと。

分析：

生徒達が良くいうのは、調べてわかっていたつもりでも、実際に話を聞くとわかっていなかったことが実感できるということである。どんなに詳しい資料を調べても、体験者から直に話を聞くことには及ばないということである。いかに情報化社会が進んでも、本物と出会い、人から直に話を聞くことの重要性を認識して、プログラムを組んでいくことが大切であると実感した。

また、この研究旅行を通して、友達との絆が深まりあった場面をよく見かけることができた。行事は体験を通しての教育であり、教室で座って学んだことを実践する場として、生徒の心に深く刻み込まれる大切な場として、残していかなければならないことも、改めて認識させられた。

Ⅷ. まとめ

「国際理解と平和」というテーマのもとに平和学習に取り組んだ一年であった。本年度は、９月から後期にかけて行った研究旅行グループでの広島平和学習より以前に、６～７月に平和学習グループによる研究で広島や日本に限定せず、子供の権利条約、国際ボランティア、スポーツ交流、黒人奴隷、人種差別など、世界を視野に入れて平和と国際理解の学習ができた。

また、英語科と総合人間科とのクロスカリキュラムで国際理解の授業を２年間にわたって実施してきたので、平和学習と国際理解学習のバランスがとれていたと思う。

戦後59年を経て被爆者、戦争体験者が高齢化し、研究旅行で生徒に証言をしてくださる方の確保が難しくなってきている。本年度の研究旅行のフィールドワークでは、戦争体験者ではない世代で平和活動に取り組んでいる方を訪問して、平和活動の内容やその意味、活動している人の思いを聞いたグループがいくつかあった。平和活動をしている若い世代の方々に話を聞いた生徒たちは一同に「戦争を風化させないように、これからは私たちが戦争の無意味さ、悲惨さを次の世代に伝えていかなくてはいけない」という意識を強く持つことができた。

一般に広島を中心とした平和学習は「戦争被害」の学習に偏りがちであるが、本年度はアジアの国々の立場からの学習も含めたので「戦争加害」についても学ぶことができた。丸山先生の講演を聞いて日本と朝鮮の間の問題について認識を深め、広島でのフィールドワークでは、原爆被害、被爆者問題、都市・産業の復興といったテーマだけでなく、平和活動団体、被爆二世の平和運動、中国人・韓国人留学生の見た日本、美術を通して伝える平和、広島の小学校が発信している平和などについても調査し、被害と加害の両面を知り、平和と国際理解の重要性を学ぶことができた。